

2001 年に総会議決した〈ビジョン 21〉の精神、思い起こそう

C.P.I. の 29 年間は、

行動すれば、助かる人がいる、
だから行動する、という積重ねでした。

2001 年の総会で、当初目標を決め、
2020 年をその達成年として活動して
きました。期しくも、東京オリンピック年です。

私たちが教育里親運動によって教育支援を始めたとき、
子どもたちは勉強を励ます相手、の小さな存在でした。
いま、多くの教育里子たちは大人となり、いろいろな立場
で働いています。

インドネシアでは、4,500 名を超える卒業生が、日本の教
育里親さんを慕いつつ、社会であるいは大学で頑張っ
ています。彼らとの話し合いを、10 年ほど続けてきました。

C.P.I. の現地事務所は、首都ジャカルタ
「官民協力・連携の施設 SM 改ワ」の
10 階にあります。



その結果、子どもたちの地域によっては、特に生活向上
のために学ぶべきことがあること、飲料水で健康を著しく
損ねている所のあること、日本の大学との連携を望んで
いる大学があること、こういった様々なことがわかりました。
社会で活躍している人々、或いは協力者の皆さんと、手
を携えて解決しなければならないと、強く考えております。

実の親子でも同じ目標を掲げて進むことは、稀なこと
なのに、教育里子たちとは、社会の貧困を救い、日本人
との連携を高めようという、同じ目標を共有できています。
素晴らしいことではありませんか。

(1) C.P.I. の教育里親の奨学支援対象地域・対象とする学生について、数年前から、現
地会報でご相談してきました。2021 年には、根本的見直しを図ろうと思います。



ジャワ島 8 州と、南スラウェシ州に、拠点があります

私たちは、インドネシア共和国の、貧しいけれど
勉強を頑張っている子どもたちを選び、中学 3 年
生から高等課程、さらに大学 2 年生までの奨学支
援をしてきました。

2017 年までに、奨学生累計 4,964 名 x 平均 5
年 = 25,000 名。C.P.I. として誇り得る数字です。
ここで、通常の学校への奨学を、見直してみるた
めに、現在の支援状況を以下に記します。

インドネシアの子どもたちの現状

- 政策・全国では、初等科入学率が100%に近い。
・公立学校では、中学生の学費が無料になった。
・高校生の学費と卒業試験の費用支援は必要。
・都市・地方間の教師のローテーションがない。
・教師に郷土愛が育つ一方、能力向上に難あり
- 課題・女子は、求職が圧倒的に高卒対象が多い。
高卒を目標に支援する必要がある。
・男子は、中卒と大卒に求職がくるので、高校から大学2年生を対象に支援が必要。

インドネシアの普通学校への奨学

- 普通の高校＝1年生から卒業までの支援を行い、
国立大学入学者は、大学2学年まで支援する。
支援の方法：学費・通学費は6ヶ月毎に支給。
3年生は卒業試験費を学校に払う。
奨学生の義務：家庭の状況や住所の変化・成績・
試験結果を、地域センターに報告する。
社会活動・励まし活動に参加すること。
- コミュニカレτζジ＝参加者の中から優秀者を奨学

地域リーダーに協力する多くの ボランティアの若者が、 教育里子卒業者から育っています



2015年2月の、インドネシア 奨学生卒業者リーダー会議にて。日本の若者たちとの連帯も、望んでいます。

奨学生修了者たちは、 お互いに励ましあう活動を SNSサイトで始めています。 参加メンバーは、600名を超えました。



学窓を卒業した教育里子たちは、 自分たちの手で、 普通学校の奨学制度を引き継ぐために、 準備を進めています。

引継ぎ予定日は、2021年7月1日です。
すでに、ジャカルタ、中部ジャワのジョグジャカルタとブミアユが、達成間近です。

C.P.I.が教育支援を始めた 1988 年、ジャカルタの教育里子 7 名からの開始でした。

インドネシア教育の父と呼ばれる故・ハジャルデワントラ氏が、1945 年の独立前から組織していた「タマンシスワ」という教育組織を協力者としての、ささやかな始まりでした。其の年、全国の「タマンシスワ」教育委員がジャカルタに集まり、日本との奨学制度の是非について討議を行いました。これは大変に重要な会議でした。

日本人の多くが忘れてることがあります。

戦前から戦中にかけて、日本政府は「南方留学生」という制度をつくり、アジアから優秀な人材を留学生として招き、親日家の養成に努めました。

当初の意図はよかったですのですが、次第に日本軍に協力するように要請し、それは加速しました。

もちろん、インドネシアからの留学生も同様でした。

そのような過去がありましたから、C.P.I.の背景や活動意図についての質問が数時間あったことを思い出します。最終的に、日本人とインドネシア人の友情と信頼を築くものとして、教育里親制度は、満場の拍手をもって迎えられたのです。

ですから、C.P.I.の活動は、単なる援助やコンサルタント活動ではない、ということを肝に銘じていきたいと考えます。

いままでに、C.P.I.は、4964 名の教育里子と、彼らを通じて協力者となって下さった大学人、現地政府の方々との、強い絆を築いております。

今後は、彼らとの連携を考えた活動を致しましょう。

(2)『現地との、広い連携を図る』努力を、ますます高めます

ところで、
**困っている人々の現実が『わかる』とは、
自分自身が『かわる』ことでもあります。**

29年間、教育里親運動をととして
C.P.I.のI=『自分を変えていくこと』を
呼びかけてきました。

支援方法も変革が必要です

C.P.I.の教育支援が目指すのは、
子どもたちの自立を応援すること。
ですから、これから、最も必要とされる、
農・山・漁村への教育支援を強めます。

**彼らが地域振興を目的にした教育を受ければ、
地域の生活向上に積極的になるでしょう。
農・山・漁村の将来を明るくする一番の近道です。**

C.P.I. は、地域の課題を解決するために、山村
の人材養成(2003年～)薬剤師養成(2007
年～)海洋資源保護教育(2013年～)など、イン
ドネシアのコミュニティカレッジづくりに、先頭
きって取り組んできました。

**漁業に希望を持てる
教育を島々の漁村に！**

薬剤師に継続教育を！

学校の飲料水を安全にすることを教える。

健康は、なにより大切な教育環境です。

国際機関からの受託事業、
日本政府機関とのパートナーシップ
日本の地方自治体との協力、
有力大学との協力推進などが大切です。

キーワードは“連携”です。
C.P.I.の目的達成のためには、相手国内の情報
を正確にとり、こちらの力を見定めて、現地内の
きちんと協力してくださる組織と足並みを揃えて
いきたいと考えております。

C.P.I.が、現在、活動地域に於ける事業別調査
および実施を進めているのは次のとおりです。

教育里子奨学支援、
小学校浄水装置の設置の推進、
薬剤師組合対象の新技術研修への協力、
農山村のコミュニティ振興の教育開発、
漁村のコミュニティ振興の教育開発
漁業組合を対象にした日本の技術導入、
漁業の新技術を移転する大学間協力推進、

これらすべてについて、
C.P.I.は、現地協力者を確保しています。

PPKIJ の奨学制度の地域リーダーの方々、
各地の教育省出先機関の長、
組合省のチアンジュール市の出先機関の長、
世界銀行との連携で成功させた農業組合長、
南スラウェシ州の有力大学の学長とスタッフ、
インドネシア漁業訓練開発センターの皆さん、

これらに関係するインドネシア政府の教育省、組
合&中小企業省、内務省、水産省の幹部の
方々、そして日本との大学間連携を望む有力な
大学組織とは、それぞれ強い絆があります。

これらは、皆様のご支持と、29年間の奨学活動
の信頼で築けたことです。深く感謝を致します。

2003年から取組んだ山村振興策は
立派に実を結びました。

その成果を引き継ぎ育てる若者のために
コミュニティカレッジの充実が必要です。



プロジェクト開始時



2017年の5人の奨学生

C.P.I.が2007年に造った薬剤師養成学校の
修了生を含めて、薬剤師組合の人々には、
新しい技術研修支援が必要です



インドネシア中央政府からの視察訪問

漁村に中学生の男子が戻ってきた！
これこそ、コミュニティカレッジの成果です。



村人集会で説明会を開く(上)
中学校併用のカレッジ(右上)
近くの島から村の船で通学し
てきた男の子たち (右下)



C.P.I.は、非政府非営利法人として、
政府間援助(ODA)ではなかなか進まない
課題を、現地政府や大学との連携を図り、
小さくても効果的な活動を行ってきました。

ですから、高い効果を得ることができ、
失敗の少ない道を行くことができるのです。

コミュニティ振興の教育開発とは

C.P.I.会長 小西 菊文

私は、実は、東京都にコミュニティカレッジという
制度を持ち込んだ三人のパイオニアの一人です。
1886年頃と思いますが、私は当時、京都で活動
していました。ある日、コミュニティカレッジ先進国
USA から、ランシング市とチャタヌガ市のコミュニ
ティカレッジの学長さんが京都へ来られました。
「ぜひ日本でも、地域経済の特色を振興すること
を目標とする教育を開発するべきだ」
と熱く語るお二人を口説いて、同志とともに、車で
夜中に東京まで行った日のことを忘れません。
お二人は、東京都の職員に話をするために、ボラ
ンティアで行ってくださったのです。
京都見物を、途中でとりやめて、でした。

当時の東京都には、自費でUSA にコミュニティカ
レッジの視察に行かれた、相田さんという、熱血職
員がおられました。私たちは、彼に連絡して、関心
のある職員さんたちを集めてもらうことにしました。

到着してみると、急遽用意された研修センターに、
満員の皆さんが待っていてくださり、感激でした。
そこで講演をきっかけに、いまの東京都の生涯
学習構想が生れたのです。

そして今、日本では、農林水産省が先頭に立っ
て、農・山・漁村の地域コミュニティ振興のための
大学づくりなど、教育開発を進めつつあります。
「地域経済の特色を振興することを目標とする教
育を開発すべきだ」という、あの学長さんたちの
思いが、ようやく届いたような気がしています。

インドネシアでは、まさに今、その教育が大切で
す。この教育開発に手を貸すことができれば、日
本と日本人は、必ずインドネシアの人々の信頼を
結ぶことになるかと確信しています。

日本政府は、早くそのことに気づいて行動にでる
べきだと、強く訴えていきたいと思っています。



Dr. ARI WIDIASTUTI
インドネシア政府 BKKBN
(家族計画推進機構)
勤務地: BKKBN ジャカルタ本部
家 族: 中部ジャワ・ブレベス 在住
(写真は、ブレベスの家で)

そのとき、そのときの仕事を精一杯して、その経験を次に活かしてきました

この手紙を書く機会をくださったC. P. I. の会長小西さんに感謝します。私の教育里親さんは、新井さんご夫妻なのですが、とても残念なことに、卒業して以来、お会いしたことがありません。ご夫妻に、この手紙をご覧いただければ、嬉しく思います。

私の実家はスマランです。私が4才のときに父母が離婚しましたが、父とは、休みの日や Eid Mubarak の祝日には、よく会っていましたので、私は父母の愛情をうけて育つことができました。母は私が10歳になるまでチルボン市で暮らし、その後スマラン市に引っ越しました。私には父母の間に生れた妹と、ほかにも弟や妹がいて、つまり、家族は大人数だったわけで、私は家族のお荷物になりたくないと考え、奨学金を探しておりました。

高校のときに、バイオロジカルのクラスにはいりました、というますのは、科学が好きだったからです。

子どものときから、勉強は好きでしたし、みんなと一緒に働くのも好きだったような記憶があります。

1994年に PPKIJ (インドネシア日本教育文化センター)からの奨学金を戴けたことは、幸運でした。

当時、私は、PPKIJ のローカルリーダーであるダルヨノさんを手伝っていき、そのご縁で特別に奨学生になることができましたと思います。高校を卒業した後、国立デポネゴロ大学の英語学科の学生となりました。でも、科学の道が諦めきれず、大学1年生の終わりに、UMPTNというテストを受験しました。英語で受験したのです。医学部に入ることができました。1995年のことです。その一方で、PPKIJ の後輩たちを助けて、英語を教え、里親さんへの手紙の書き方を教えたりしていました。自分の勉強、家族や友人や後輩たちの面倒をみて、日本語では「HACHIMEN ROPPI」というのですか？ そういう

生活をしていました。当時の C.P.I.-PPKIJ は、大学卒業まで奨学金を下さっていましたから、私は、医学部を卒業するまで学費を助けて戴きました。医学部は、ほんとうに勉強が大変でしたから、とても有難かったです。

2001年の1月に、私は医者の資格を戴きまして、スマランの私立病院で2002年まで働きました。そのときに、Safe Mother by food Project で世界銀行のコンサルタントの資格を戴いて、2003年から2004年まで、ブレベス市で働くことになりました。

このプロジェクトは、妊婦さんの食事をきちんとさせ、健康面、家族計画、子どもの教育を指導し、ブレベス市の若者や家庭の健康管理を支援したりする仕事で、やりがいのあるものでした。このときの経験とキャリアが、いまの仕事につながっているので、これは本当に運命だったなと感じております。

2004年にいまの夫と知り合い、結婚してブレベスに移り住んで、世界銀行の仕事が終わってからは、開業医を始めました。ところが、同輩が話をもってきてくださって、ブレベス市の新しい病院で、救急センターの医者としての職を得ることになりました。その病院は MUTIARA BUNDA HOSPITAL という名前で、救急医療に力を入れているところに特色があります。とても意義のある仕事だと思いましたから、すぐに働くことを決めました、そのかわりに二つの仕事の掛け持ちで、とんでもなく忙しくなっていました。でも、若かったので頑張れました。人々の生活、性格、暮らしのリズムに、医療も合わせていかなければならないということを学びましたし、医院の経営についても学ぶことができました。お金の面ですが、「求められる病院像」のあり方について学べたことは、大きな収穫だったと思います。

卒業した教育里子からの寄稿文(1)

その病院には、2009年までおりました。それは、しばらく仕事をしないで子どもを産みたいのと思い、医者としてもう一度勉強したいという思いがあったからです。医者としては、リハビリ専門医になりたいという夢がふくらんでいましたので。

ところが、2009年に、子どもを産むことなく亡くしてしまい、絶望に陥ったことがありました。夫と家族の励ましで立ち直ることができたのです。両親は、政府の仕事をしたらどうかと勧め、家族計画推進を担当するBKKBNに申請をして採用されました。

BKKBNの事務所はジャカルタにありますから、夫とは週末にしか会えない日々です。

でも、とても充実した仕事をしております。

初めに、男性の、家族計画への積極的参加を促す仕事につきました。インドネシア各地で会合を開き、家族計画が人々の生活環境をよくすることを訴えました。男性の積極的参加により、母子は、健康はもとより、教育や能力向上に向き合うことができます。そのように家庭がよくなりますと、国家もしっかりしたものになるということですから、政府は、家族計画の推進に力を入れています。

2011年に、BKKBNは、「国家家族計画および人口抑制」を担当する役所として昇格いたしました。私は、国家戦略特区の＜家族計画推進局＞に配属され、はじめの頃は、国境地域、島々など、僻地を巡回しておりました。

大変でしたが、「電気がなくても、すぐに子づくりするのではなく、計画的な出産を」と囁みくだいて分かってもらえるよう指導する経験は僻地でこそできたと振りかえっています。そのような経験を経て、2014年に、都市部の貧しい地域での家族計画推進部に移りました。どのような地域に、どのような人々が暮らしていて、何が不足しているのか、地道に調査する毎日でした。その結果をガイドマップにして、調査担当者や家族計画推進者に配りました。その後の仕事は、避妊に関することで、直接人々と向き合い、協力企業を数多く獲得しなければならない毎日です。交渉は時間がかかり、リスクを伴う仕事です。しかし、大切なことなので、頑張ります。

私が奨学生の後輩たちに言いたいことは、そのとき、そのときの仕事を、精一杯することで、その経験が次に生きていくということです。

卒業したメンバーは、機会があれば、自分の経験を後輩たちに伝えてあげることが大事だと思います。それから、日本の教育里親の皆様が、ご自分たちの教育里子の自立していく様子を、私の手紙で少しでも知っていただけたら、嬉しく、また、有難く思います。

長文をお読み下さいましたことに感謝します。どうも、ありがとうございました。



BKKBN(家族計画推進局)の倉庫にて。真ん中に ARI さん





Mr.Mochamad Nur Asyik

車販売その他事業会社社長

勤務地:西部ジャワ・ボゴール

家 族:西部ジャワ・ボゴール 在住

今回は、PPKIJの交換サイト「心の友」を通して、自分の生きてきた道を振り返って教育里親さんに伝えよう、と募集がありましたので、手をあげることにしました。

私は、中部ジャワのレンバンという、果物で有名なところに生まれました。誕生日は、1977年の、教育記念日(5月2日)です。両親は農業をしていましたが、子どもの教育には熱心だったようです。「おまえには、お金は残せないけど、学校には行けるようにしたいよ」と、父はよく言っていました。1984年に小学校に入ってから、私はずっと学年で成績一番でした。その一方で、床の掃除、お風呂場の掃除、両親が帰る前にお米を食べられるようにしておく…など、家の手伝いを結構がんばっていたことを思い出します。中学にはいつからか、家は相変わらず貧乏でした。教科書も買えないときは、親しくなった上級生のお古をもらっていました。政府の役人や金持ちの子どもたちに負けるものかと、気を張っていたと思います。頑張ったので、希望する高校に合格できました。

子どもの頃の夢は、学校教師になることで、英語の苦手だった同級生に教えてあげたときに、「これこそ天職だ」と思ったものです。高校2年生のとき、先生に推薦されて、PPKIJ(インドネシア日本教育文化センター)の奨学制度を紹介されました。奨学生として分かったことは、その奨学金が、日本のく教育里親さんへの寄付で賄われていることでした。しかも、大学に入ってからでも継続して下さるとのことと、とにかく大学に入学したいと強く意識しました。経済的な支えがなかったならば、そこまで頑張っていたかどうか、わかりません。1996年に、有名なボゴール農業大学に、なんと高校からの推薦枠のあるUSMIという制度で入学できました。農業社会経済学を選考しまして学業に専念できたのは、C.P.I-PPKIJの奨学金のおかげです。そのあと、PPAという政府奨学金も戴くことになりました。

ACADEMIC ENHANCEMENT ACHIEVEMENTという奨学金で、成績は良いが学費を払うことに困難な学生に与えられるものです。3年生からは、学校の講師や、留学生への家庭教師をして、収入を得ることもできました。

大学を卒業してから、驚かれるかもしれませんが、子どもの頃からの夢だったはずの学校教師の道を捨てました。先輩のASEP SAEFUDDIN教授とWIDIYANTO DWI SURYA博士の会社に勤めることになったのです。一番の理由は、両親が農業から手をひいて、隠居したことが大きいです。入社した会社は、農業ビジネスの分野で、コンサルタント・MICE(Meeting, Incentive, Conference, Exhibition)の運営、FLAVORED BEVERAGESの生産と貿易を営み、急成長しました。最初は、苦勞しましたが、生来の負けん気で頑張りました。ところが、1997年ソロスによる経済ショックで、とくに輸入部門が突然の打撃を受けて、閉鎖せざるをえませんでした。

私は、ネットワークマーケットを開発して、新しくビジネスを立ち上げ、事態を切り抜けていきました。また、さらに、ボゴール農業大学の卒業生用のカレッジ(ある種のコミュニティカレッジ)で、ビジネス手法とネットワークマーケティングを学び続けることにしました。働き始めてからも学び続けることができる、このような制度は、素晴らしいことだと思います。

そこで貴重な経験を教えて下さった会社の皆さんへの感謝も込めて、私は、2020年まで、ボゴール市のイスラム学校の「卒業生家族のための自立協会」の講師をすることにしました。

いま私は、骨太な生活の形をつかんでいます。

ビジネスは神に御心に委ねるとの精神でいます。

これからは、経済的に恵まれなくても勉学を続けたい人々を支援しながら、信頼をつくり、手を携えることで、ビジネスを発展させたいです。そして、妻と3人の子どもたちと、よい家庭を築こうと思います。



Mrs. Euis Kuskiningshih

個人塾教師

勤務地：西部ジャワ・チアンジュール

家 族：西部ジャワ・チアンジュール 在住

(写真：家族写真の左から二人目)

私の人生は、とてもカラフル！

私は、チアンジュールの小さな村で生まれました。1973年の4月7日です。両親は小学校も出ていない、でも強い気持ちで生き抜いてきた人たちでした。8人の子どもたちを養うために、毎日バソ(肉団子)を売って…。1986年に卒業するまで、私は歌が好きで、先生はよく彼のギターの演奏に私の歌を合わせようとしていました。褒められると嬉しくなってほかの科目も頑張ったおかげで、成績はよかったです。

中学のときも、その情熱は変わらず、学年で一番を通していました。1989年に中学を卒業するまで、とくに好きだった英語を、特別に毎日、勉強させてもらいました。高校でも成績がよかったので、政府から奨学金を受けることができました。

普通は、こういう若者は、誰でも大学に行きたいのではないのでしょうか？もちろん、私もそうでした。でも、両親の経済状態では、それは許されることではありませんでした。1992年の卒業試験さえ、受けられなかったのです。それは、悔しいことでした。それで、持っていた本を学校に売り、税務事務所に職を得て、働きながら卒業試験を受けて合格し、高校卒業の資格をとることができました。

しかし、税務事務所には申し訳なかったのですが、まもなくそこを辞め、PPKIJ(インドネシア日本教育文化センター)の職員となりました。そこで、C.P.I.の会長・小西先生に出会うことができました。沢山のこと、コミュニケーションの方法論、様々な

人々や組合との折衝や協力の仕方、養魚場組合の運営、トウモロコシ生産組合での経験、山羊の飼育と増産運営の仕方、などを行っていた数年間は、よい思い出です。小西さんは、よく PPKIJ の建物に泊まりこんでいましたから、スタッフの皆で集まって話をし、食事を一緒にして、それも楽しいことでした。

そのうちに、PPKIJ に遊びに来ていた日本の会社から請われて、その仕事を手伝うことになりました。そこにいたときに、学士相当資格をとることができました。1998年に結婚して退職し、翌年に子どもを授かりました。その後、2002年まで、経験を買われての会社勤務を経て、自宅で英語の塾を始めました。そのうちに、私がコーラン(イスラム経典)をよく読めることが知られ、今では、英語とコーラン読解の教師を、小学生相手にするようになり現在に至っています。生徒は100名ほどで、午前8時から夜9時まで教えています。知識と健康を授けてくださった神様にお礼を申しあげ、いちばん大変だったときに私を大切に下さった C.P.I.の小西先生、PPKIJ 現・理事長のアナム先生にお礼を申しあげます。私生活で面倒をみて下さった UNI UPI (UPI 姉さんという意味)にも感謝しています。PPKIJ におりましたときに出会った C.P.I.の皆さんとは、楽しい思い出ばかりです。皆さん、私の人生をカラフルに、彩ってくださいまして、ほんとうにありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

ウイスさんの思い出といえば、養魚場の視察に行った日のことだ。餌やり、養魚生簀の網の点検、駐在の係との話し合いを終えて、陸地に戻る船の中で固まるウイスさん。聞いても答えず、ようやく駐在小屋に、財布を忘れたと打ち明けた。すぐに船を戻して事なきを得たが、そのときの彼女の声が忘れられない。「迷惑がかかるから言えなかった」と。責任感のある、信頼できるスタッフだった。(小西会長から聞き取り)